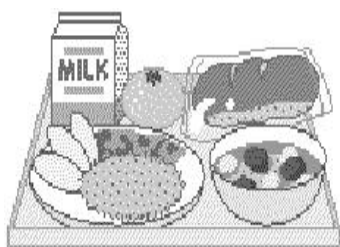


## 学校にある居場所の開発・ 活用により不登校の予防を ～昼休みを理科準備室で過ごすことにより、 欠席・遅刻が減った生徒の事例～

### 1 きっかけ



#### （１）きっかけ

スクールカウンセラーから「不登校気味のA男について、なんらかのアプローチができないか。」との相談を受けました。1，2年生のときに、理科の授業を担当していたこともあり、また、昼休み一人でぼつんとしていると担任から相談を受けていました。担任はこの年初めて学級担任になり、こういう生徒への対応について、養護教諭，スクールカウンセラー，そして生徒指導担当の私に相談に来ていました。そこで私が接することのできる時間帯である昼休みを使い，A男とかかわることを提案しました。担任の了解のもと「昼休み理科準備室に遊びに来ないか。」とA男に声をかけました。

#### （２）生徒の様子

中学3年男子。中学1年時から欠席・遅刻が多く，授業を抜け出して体育館の倉庫に隠れていたこともありましたが、合唱部に所属していますが，学級や部活動で特に親しい友人はいません。1年生の時の男性担任との個人面談で，突然に性に関する相談をし、担任を驚かせたこともありましたが。

家庭環境は，父母，妹と本人の4人家族です。身の回りは散らかっていることが多く，学習用具の紛失を恐れ，毎日目一杯教科書類を詰めた重い鞆を持ち登校していました。また，学級の友達との些細ないさかいから，無断で帰宅してしまい，私が自宅まで迎えに行ったこともありましたが。



## 2 実践のための準備

### アセスメント

子どもの発達相談や教育相談にあたっては、対象となる子どもを理解するための情報収集と分析を行う必要があります。これをアセスメントと言います。

アセスメントでは、担任や学年の教師、養護教諭、スクールカウンセラー等、様々な立場からの情報をもとに一人一人に合った支援の方向性、援助の指導方針を決めていきます。

また、その際には、学習面や行動面の様子、家庭の状況、発達検査等の情報を多面的、総合的に理解することが求められます。

### チーム援助と援助の方針

子どもは、多様な人間関係のなかで、援助され成長していきます。子どもが援助を必要としている時、子どもに接する教師、保護者、スクールカウンセラー等が、子どもが見せる姿の違いを理解し、子どもに合った援助をする必要があります。

そこに、チームとしての援助の方針があり、連携することの必要性があります。

### (1) 日頃の生活についての情報収集

#### ① 担任からの情報

日頃の学級での様子や人間関係についての情報を、担任から提供してもらいました。まず、遅刻・欠席が多く、授業でのクラスの生徒との接触が時間的に少ないことが分かりました。学校生活では休み時間や移動教室のとき誰と一緒にいるか。また、教室で自由に振舞える居場所がどの程度あるのかを確認しました。その結果、休み時間等はほとんど自分の席から離れず、座ったまま一人でぼつんとしていることが多いこと。また、特別教室での授業への移動はいつも一人で、ほとんど一日誰ともかかわらず生活している様子が浮き彫りになりました。

#### ② 養護教諭からの情報

保健室に来ることはあまりないが、いつも元氣なく下を向いていることが多いとのことでした。

#### ③ スクールカウンセラーからの情報

スクールカウンセラーとの面接は毎週のように行っていて、一緒に体を動かしたりすることもあるようでした。ただ、これも週1回なので毎日の生活の中で、何かかかわれるものがないかとの相談でした。

### (2) 具体的ななかかわり方について周囲の先生方と相談

具体的にどのような方法でかかわっていくのが良いかをスクールカウンセラー・学年職員・養護教諭と一緒に相談しました。その結果次のような条件が出てきました。

- ① 毎日一定時間かかわる。
- ② 本人の負担にならない形でかかわる。
- ③ かかわる場所は他の生徒から隔離された場所が望ましい。

### (3) 具体的ななかかわり方を決定

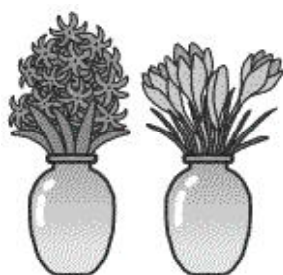
このような経緯を経て具体的ななかかわり方を考えました。時間については、ぼつんと一人でいる時間が長い昼休み。場所は、他の生徒が自由に出入りできず、一人でいても時間をもてあますことのない理科準備室を考えました。

### 3 とりくみ

#### 言葉かけのタイミング

この事例では本人に理科準備室に来るように誘ったあと、自主的な来室を待っていました。さらに、来室した際にも、積極的に質問をしませんでした。子どものペースに合わせ、まずは信頼関係づくりの構築を最優先させていたことがうかがえます。

子どもの実態や状況に合わせ、焦らずに、言葉かけのタイミングを見つけていくことが大切です。



#### (1) はじめの言葉

朝の登校指導のとき、やや遅刻気味で一人で歩いて来るA男に「昼休みに理科準備室に遊びに来ないか？」と声をかけました。戸惑ったような顔をしながら「考えておきます。」と答えて、小走りに昇降口へ向かいました。その日、私は昼食を早めに切り上げ、理科準備室の電灯をつけて待っていました。昼休みにさっそくA男は、理科準備室のドアをノックしました。

#### (2) 初期（4月～7月）

- ① 当初は、私の勧めるサンプルプレパラートを顕微鏡で見たり、音の実験用器具で音を鳴らしたりと、理科準備室にあるいろいろな教材・教具を興味深げに手にとって遊んでいました。また、教師の読んでいる不登校関係の本を読んだり、体のつくりについて書かれた大学の保健の本を読んだりしていました。教材や本についての質問はありましたが、それ以外の学級の話などはほとんどありませんでした。また、私からも特に聞きませんでした。
- ② 理科準備室は、私がバリカンで希望者の頭を坊主にする場所でもありました。このため昼休みに運動部の男子生徒が「坊主にして欲しい。」と、髪の毛を切りに来ることもありましたが、こんなときA男は、隣の準備室へ行き、他生徒と接しようとはしませんでした。
- ③ 私が時折家庭での悩みや、学級、進路についての話をしますが、一問一答的で積極的にA男から話すことはありませんでした。
- ④ スクールカウンセラーとの面談の時間にはストレッチ体操等で体のリラックスを図っていました。

#### (3) 中期（9月～11月）

- ① A男の方が昼食が早く終わったときは、準備室の外で待っていることもありましたが。
- ② 昼休みに理科準備室に来る他学年の男子生徒と、教師との会話に同席するようになりました。
- ③ 坊主にする作業を見ながら、同行してきた生徒と会話をしたり、タオルを用意してくれたりするようになりました。
- ④ 教師と二人だけのときは、自分から「昨日家であったこ



と」「学校の授業でのこと」「進路のこと」など、今思っていることを積極的に話すようになってきました。

⑤ スクールカウンセラーとの面談の回数は少なくなってきました。

#### (4) 後期(12月～1月)

① 教室で男子のグループの輪に加わる場面も出てきました。理科準備室には、時々進路についての相談をしに来ることはありましたが、それ以外はほとんど顔を見せなくなりました。

② 休日に友人宅に遊びに行くなど、今まで見られなかった行動が出てきました。

③ この時期、遅刻・欠席は全く無くなりました。

## 4 見えてきたこと

### (1) 欠席日数等の変化

2年生の夏休み明けの体育祭の練習をきっかけに、増えてきていた遅刻・欠席は、昼休みの理科準備室通いが始まるにつれ減少していきました。

- 1年 3日
- 2年 14日
- 3年 4日



〈資料1〉 中学3年時の欠席・遅刻・早退の状況

	4月	5月	6月	7月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
欠席	1	0	2	0	1	0	0	0	0	0	0
遅刻	1	4	9	7	3	0	1	0	0	0	0
早退	0	2	2	0	0	0	0	0	0	0	0

### (2) 人間関係の変化

#### 対人関係能力が落ちている時

対人関係能力が落ちている時には、自分から人のかかわりを持つという場面を避けるようになり、集団の中に入っていくことには

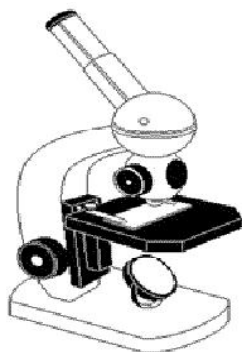
4月当初、クラスの女子とは、必要に応じて話すことはありましたが、クラスの男子とはまったく話すことはできない状態でした。しかし、理科準備室でのA男とは縁遠い、他学年の生徒たちとの会話から、話すことへの自信がついていったように見えました。話すときの顔の表情はだんだんと緊張がほぐれ楽しんで会話に加わるようになっていきました。

大きな抵抗があります。

相談室や保健室に通い、一人で過ごすことが多い子どもには、まず教師が1対1でゆっくりとかかわることで安心させるようにします。

その次に、教師もかかわりながら、本人の抵抗の少ない人（本事例では、他学年の生徒たち）とのかかわりを支えていきます。活動の内容も、言葉を使わなくても「絵」で表現したり、身体を動かしたりという「非言語的なかかわり」からはじめ、少しずつことばによる表現も取り入れていくというような工夫を考えましょう。

大事なことは、「人とかかわることの心地よさ」を味わわせることです。その中で子どもは「人と上手く付き合っていく自分」をイメージし、自分から他者とのかかわりを求めるようになっていきます。



### （3）うまくいったポイント

今回A男が比較的うまく学校の日常生活に復帰できた要因として、以下のことがあげられると思います。

- ① 自分にとって、一人ぼっちという辛い時間帯に、かかわる時間を設定したこと。
- ② 理科準備室が、保護された空間であり、また、興味深い教材教具などが豊富にあったこと。
- ③ 自分とは関係の浅い他学年の生徒などが、少しずつかかわっていき、またそれについては、いつでも拒絶しようと思えばできたこと。

### （4）人間関係づくりの苦手な生徒への支援として、この結果から考えられる応用と課題

#### ① 場所について

A男のように、人間関係づくりの苦手な生徒にとって、自分の苦手とする時間帯を、理科準備室のように保護された空間で自由に振舞えるならば、自然とその場所に居つくようになると思います。このことから考えると、学校内で同様のスペースとして、いろいろな場所が考えられると思います。たとえば、体育教官室、美術・家庭科・技術科等の準備室、学年室、生徒会室等です。ただし、男性教員が女子生徒について対応する場合は、十分に配慮が必要になるでしょう。

#### ② 時間帯について

今回は担任ではない立場だったので、昼休みを利用することができました。しかし、担任だと放課後の時間でしか対応できないでしょうし、部活動の指導にも影響が出てくるでしょう。また、担任として一定の生徒に継続的にかかわっていくことは、他生徒への影響も心配されます。

#### ③ 方法について

興味あるものがいろいろ置いてある理科準備室だったので「行ってみようかな」という動機付けになったと思います。カウンセリング室に、いろいろなオモチャが置いてあるように、生徒が興味を引くものがあることも肝心かと思います。

また、A男は絵が苦手だったので用いませんでしたが、「コラージュ」や「スクイグル」など、言葉以外で自己表現する方法を用いるのも、1つの方法かと思います。

### コラム7【コラージュ療法とは】

中学生や高校生の場合、言葉で自分のことを話すのを恥ずかしがる子が多くなります。非言語的なかわりとして、比較的取り組みやすい手法です。

作成方法は、雑誌やパンフレットなどから、自分の気に入った写真や絵、イラストなどを切り抜いて画用紙の上に好きなように貼って一つの作品にします。

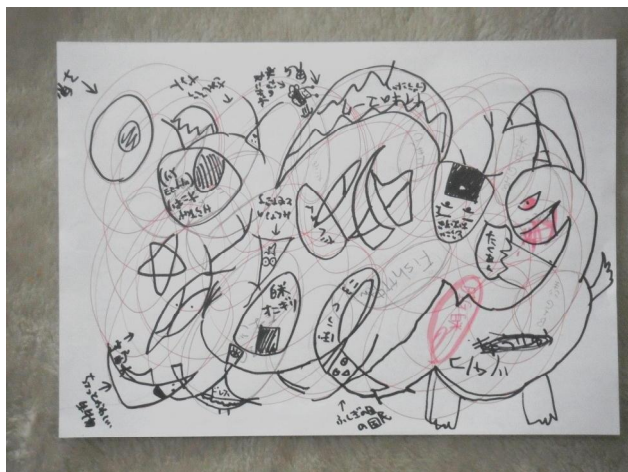
最後に教師やカウンセラーと一緒に、完成した作品を眺めていきます。言葉では表現できなかった内面に気づいたり、作品を完成させた喜びを味わったりする「今」の自分を見つめる優しい療法です。



### コラム8【スクイグル療法とは】

画用紙にサインペン、クレヨンなどで、どちらか一人が、適当に一筆書きで好きなように線をひいて、その後でもう一人がその線を使って何かの絵に仕上げる遊びです。教師のかかわり方としては、作成中はゆったりと生徒が描く様子を見守ります。

なかなか見つけられない時には、「大きなもの」「小さなもの」「硬いもの」「柔らかいもの」と視点を示すなど援助します。完成したら、作品を眺めながら何を描いたのかなと話したり、できた絵を使って物語を作ったりします。



### 《参考となる文献》

石隈利紀（1999）．学校心理学 誠信書房

窪内節子・吉武光世（2003）．やさしく学べる心理療法の基礎 培風館

